# 巨匠のタクト　新たな伝説

第56回大阪国際フェスティバル（朝日新聞文化財団、朝日新聞社、大阪国際フェスティバル協会など主催）がこの秋、２回開かれる。ロンドン交響楽団（ＬＳＯ）と同団音楽監督の指揮者サイモン・ラトル。ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団と同団首席指揮者のワレリー・ゲルギエフ。英独の名門オケと、現代を代表する巨匠が並ぶ。

ロンドン交響楽団を指揮するサイモン・ラトル　©Doug Peters

## 9月23日　ラトル × ロンドン響

## 愛と祈り　届ける作曲者の思い

世界最高峰のオーケストラ、ベルリン・フィルの芸術監督兼首席指揮者を2002年から務めてきたラトルは、昨年9月に故郷英国のＬＳＯの音楽監督となり、今回は就任後初の来日ツアーとなる。

「ＬＳＯはとても新鮮です。英国にいた時、実はそれほど振る機会がなかった。今改めて、パワフルで輝かしく深い音楽を奏でるこのチームの素晴らしさに、目を見張っています」とラトルは語る。

大阪限定の特別プログラムはまず、今年生誕100周年を迎えたレナード・バーンスタイン作曲の交響曲第2番「不安の時代」。ジャズの要素を採り入れたピアノ独奏が特徴で、1949年の初演では作曲者自らが独奏を務めた。今回は、バーンスタインとも共演機会の多かったトップピアニスト、クリスチャン・ツィメルマンが担う。

ラトルは「私にとってバーンスタインは子どもの頃からヒーローでした」と振り返る。「彼の音楽はクラシックもミュージカルもジャズも、全部の要素が入ったスープのようです」

米の詩人オーデンの同名の詩に基づいて作られたこの曲は、第2次大戦を経て核の時代に生きる現代人の孤独と不安がテーマだ。「バーンスタインの愛と祈りが詰まっており、彼の強い思いを伝えるため、メモリアルイヤーにぜひとも演奏したかったのです」

プログラムのメインとなる大曲、マーラーの交響曲第9番もまたバーンスタインと縁がある。今回の会場となる大阪市北区のフェスティバルホールがリニューアルされる前の85年、同ホールでバーンスタインがイスラエル・フィルを指揮したマーラーの9番は、今なお語り継がれる「伝説の名演」だ。

「バーンスタインは、同じユダヤ系ということもあってマーラーに尋常ではない情熱を捧げていました。命がけといっていいくらい。彼の演奏は私にとっても忘れがたいものだから、影響がないと言ったらウソになります」

「9番には、『不安の時代』と精神的に共通したものがある。強い祈りですね。どちらも長い曲だから、私たちも、大阪の聴衆の皆さんも、大変ですよ」

マーラーの死生観を反映したと言われ、深い精神性と美しさを持つこの曲を、ラトルはバーミンガム市響と91年に、ベルリン・フィルとは2011年に、来日公演でそれぞれ取り上げてきた。

「第4楽章の最後は、この世との別れのような静かに消えゆくピアニシモです。ここは、指揮者にとってもオケにとっても120％の集中が必要となり、すごく緊張します。私はカーテンコールで『作曲者をたたえてほしい』という思いを込めてスコアを手に掲げたりしますが、このマーラーの9番の演奏後はその思いが一層強くなります」

大阪公演はいよいよ9月に迫る。

「大阪は面白い都市です。同じ都会でも東京と雰囲気がまるで違うし、オリジナルの食べ物も多彩でおいしい。ＬＳＯのみんなと行くのを楽しみにしています」（小原篤）



撮影Oliver Helbig

**サイモン・ラトル**

1955年、英リバプール生まれ。英国王立音楽院で学び、バーミンガム市響とのコンビで国際的評価を獲得。今年8月に芸術監督を退くベルリン・フィルでは、現代曲の演奏、コンサート配信、教育プログラムなど新しい試みに力を入れた。94年にナイトの称号「サー」を授与された。

**ロンドン交響楽団**

1904年にロンドンの一流音楽家たちによって創設され、楽団員による芸術的主導権とパートナーシップで自主運営されている。82年にバービカンセンターが開館して以来、本拠地として年70回以上の公演を行い、海外ツアーもこなす。自主レーベル「LSO Live」を持ち、数多くのライブ録音を高音質でリリース。「スター・ウォーズ」などの映画音楽でも有名。

## 11月29日　ゲルギエフ × ミュンヘン・フィル

## 弦楽器の響きに執念

「飛び散る汗」が代名詞。長身から放つ、情熱的かつ繊細な響きで世界を席巻するワレリー・ゲルギエフが、首席指揮者を務めるドイツの名門ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団と来日する。

両者の深い関係はまもなく3年を迎える。この間、精力的に演奏してきたのがブルックナーだ。

「彼のシンフォニーにおいて、最もすばらしい伝統を引き継いだオケがミュンヘン・フィル」とゲルギエフは言う。このオケが、かつての首席指揮者チェリビダッケと歴史に残る名演を生み出してきたのは確か。その伝統を踏まえ、新たな世界を泰然と構築するのがゲルギエフ流だ。

その一つが、昨年始めた「ブルックナー・サイクル」だ。交響曲9曲を3年がかりでライブ録音する大きなプロジェクトとして話題を呼んでいる。

驚くことに、この大作曲家の眠るオーストリア・リンツ郊外の聖フロリアン修道院大聖堂ですべてを録音するという。「非常に名誉なこと。音響はまったく違うが、特別な雰囲気で気持ちが高揚します」とうれしさを隠さない。大阪公演で披露する交響曲第9番は、9月に演奏される予定だ。

さらに、「この2年でミュンヘン・フィルの配置を根本的に変えました」とさりげなく言う。

ゲネプロでは長い時間をかけて客席を歩き回り、あらゆる角度から響きをチェックする。「響き」へのこだわりが強く、執念すら感じさせるゲルギエフならではだ。

「成功の秘訣は弦楽器をいかに響かせるか。特に音色と豊かさを模索し研究し続けなければいけない。ゴールはないんです」

旧ソ連出身で、サンクトペテルブルクのマリインスキー劇場のオペラ芸術監督に35歳の若さで就任。剛腕ぶりを発揮した。その後の劇場の飛躍的な成長は「マリインスキーの奇跡」とも呼ばれている。

今回共演するのは、中国出身のピアニスト、ユジャ・ワンだ。超ミニスカートに10センチはありそうなハイヒールでピアノに向かう。ときにその奔放な装いが話題になるが、確かな超絶技巧で快進撃を続ける31歳とはすでに共演を重ねている。

今回はブラームスのピアノ協奏曲第2番を弾く。「最近もブラームスで共演しましたが、非常に印象の強い演奏で本物のブラームスでした」とゲルギエフは信頼を寄せる。

成熟しきったミュンヘン・フィルの響きの中で、2人の強い個性がどう反応しあうのか。ブルックナーと同じようにこちらも「一聴の価値」があるのでは。（谷辺晃子）

ワレリー・ゲルギエフ　©V.Baranovsky

### 第56回　大阪国際フェスティバル2018

■**サー・サイモン・ラトル指揮ロンドン交響楽団**　9月23日（日）午後2時／バーンスタイン：交響曲第2番「不安の時代」（ピアノ：クリスチャン・ツィメルマン）、マーラー：交響曲第9番／S席2万9千円、A席2万4千円（B席、C席、D席、BOX席、学生席は完売）／共催：堺市、堺市文化振興財団／協賛：朝日放送グループホールディングス、京都銀行、大和ハウス工業、凸版印刷

クリスチャン・ツィメルマン　©Hiromichi Yamamoto and DGG

■**ワレリー・ゲルギエフ指揮ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団**　11月29日（木）午後7時／ブラームス：ピアノ協奏曲第2番（ピアノ：ユジャ・ワン）、ブルックナー：交響曲第9番／S席2万5千円、A席2万1千円、B席1万7千円、BOX席2万9千円（C席、D席、学生席は完売）／協賛：朝日放送グループホールディングス、京阪ホールディングス、バイエル薬品

ユジャ・ワン　©Norbet Kniat

◇チケット・問い合わせはフェスティバルホール（06・6231・2221、https://www.festivalhall.jp）へ。

承諾番号18-3403

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。